

北日本
いつも一緒
富山のペットたち

犬や猫が飲む水の量や尿の量の変化は、飼い主さんが把握しやすい。病気の兆候の一つでしょう。



水と尿の量が増えたことに気が付き、来院されるケースが多い病気があります。今回は、その中から、インスリンの不足によって起こる糖尿病と、副腎ホルモンの過剰によって生じるクッシング症候群についてご説明します。

これらの病気は、ホルモンの異常によって起こり、内分泌疾患と呼ばれます。主に内分泌器官から放出されるホルモンは、標的となる組織まで運ばれて、組織や器官の機能を調節する役割を果たします。ホルモンの作用は、生理機能を一定に保つこととする性質の維持、成長発育、生殖など多方面にわたります。内分泌疾患は、ホルモンの過剰や不足、標的となる組織がホルモンの働きをあまり感じなくなるなどが原因で起こります。インスリンは膵臓で分泌され、血糖が全身の細胞で利用さ

飲み水・尿の量 増えたら 坪島 獣医科病院副院長 (富山市大泉北町) 坪島 あおい

内分泌疾患の疑いも

れるためには欠かせないものです。食後に分泌され、血糖値が適正に保たれます。ところが、インスリンが不足したり(I型)インスリン依存型)、肝臓や筋肉などがインスリンの効きにくい状態(II型)インスリン非依存型)が続いたりすると、糖は血中にとどまり、尿の中に排出

や妊娠が病気を悪化させていることがあります。ちなみに犬はI型が、猫はII型が多いことが知られています。根本的に治せる病気ではありませんが、適切な治療でコントロールできま

ホルモンは、下垂体や視床下部の正常な機能を抑制するため、成長ホルモンや性腺刺激ホルモンなどの分泌にも影響が出て、若齢で発症した場合は著しい成長の遅れが見られます。一般的な症状として、食欲が旺盛になり過ぎる、左右対称の脱毛、肝臓の肥大によるおなか

複数の検査で原因を確定し、内服薬を処方します。外科的な治療が必要な場合もあります。医原性の場合はず、薬を飲むことを中止します。内分泌疾患は、重大な合併症を引き起こす可能性があります。特に、たくさん水を飲む、尿を飲んだり、排尿したりする様子を観察しましょう。尿は自宅で採取してすぐ検査すれば、いろいろな情報が得られます。疑問や心配があれば、まず尿を持参して、獣医師にお尋ねください。

せつされる糖尿病になります。糖尿病になると、飲む水の量や尿の量が増えるほか、食欲の増進、神経症状(猫はかかとをつけて歩く特徴的な歩き方を示す)、白内障などの合併症が現れます。さらに症状が進むと、

の総称です。猫では珍しく、犬に多い疾患です。この病気の原因には、脳下垂体機能の異常、副腎の腫瘍、長期間にわたって副腎ホルモンを処方されること(医原性)などが考えられます。過剰な副腎

の膨満が挙げられます。尿の比重は低く、水のように薄いのが特徴です。また、二次的に糖尿病を併発することもあります。クッシング症候群の治療は、

「いつも一緒 富山のペットたち」は、毎月第一木曜日に掲載します。



糖尿病にかかった犬。治療のため、1日2回インスリン注射をする



ペットが飲む水の量に、普段から注意しよう